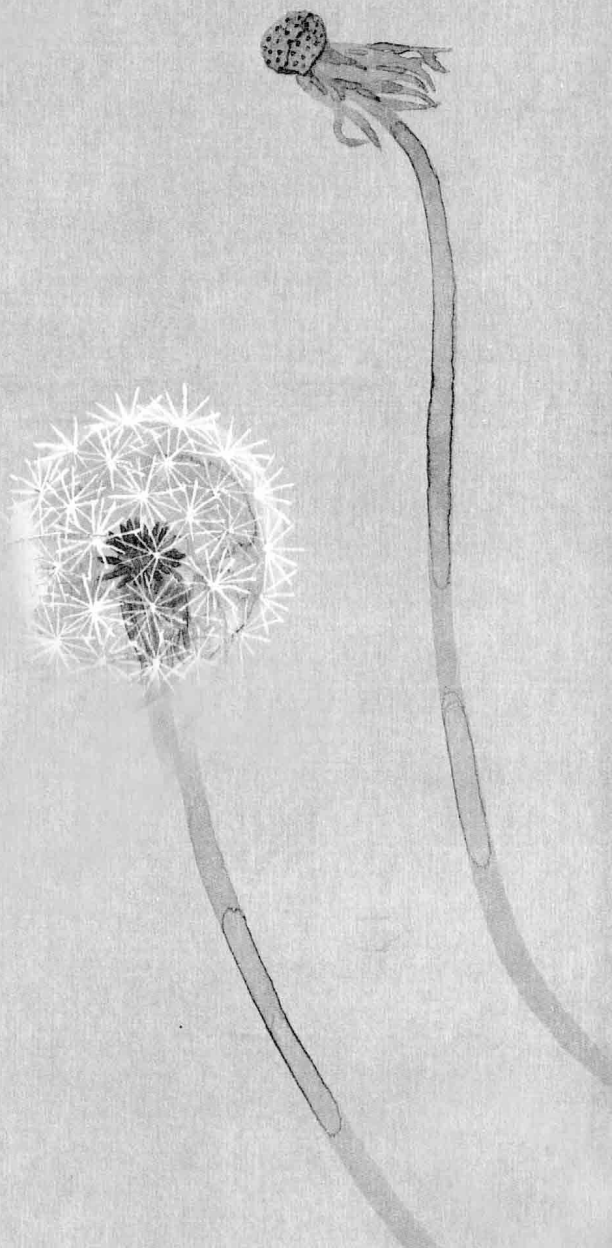


身辺歳時記

辺歳時記

健吉



文藝春秋

身辺歳時記 奥附

昭和五十九年四月三十日 第一刷

定価 一、二〇〇円

著者 山本健吉

やまもとけんきち

装幀者 堀 文子

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三 郵便番号二〇二

電話東京(〇三)二六五局一二二一

印刷 精興社 製本 中島製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

目次〈身边歲時記〉

I

身辺歳時記

- 昔の子供の遊び 9 二月の雪 13 三月生る 17 花のうた 21 美しい五月 24
 六月の花々 29 真夏の海のうた 34 山と高原のうた 38 哀しみのうた 43 「月は限なき
 をのみ……」 47 行く秋の声と色と 51 師走の句と歌 55

俳句と私

挨拶・滑稽・即興 61

風生最晩年の句 63

遊女哥川の句 65

蕉門作家五人 67

新撰百人一句

新撰百人一句 70

選び終えて 77

百句解 80

花鳥風月十二月 140

虚と実と——『奥の細道』二つの挿話——

152

II

松山と子規派の文学 169

鬼気の俳人・木歩 173

水巴さんを思う 188

飯田蛇笏 196

日野草城 205

久女讃 219

『走馬燈』寸感 226

惨たる夕焼 231

『繚乱』一瞥 234

山口誓子 239

誓子俳句私観 252

月笠氏の句業 258

麥南氏の人と句と 263

草田男氏と私 268

草田男氏を哭す 272

林火氏の俳生涯 276

高屋窓秋の俳句 282

石田波郷 285

加藤楸邨 298

後鳥羽院、隠岐、楸邨 312

静塔俳論讃 323

兜子追悼 328

『四温』讃 331

『幻戯微笑』	跋	332
『信長の首』	跋	338
『流され王』	跋	347
あとがき		357

身辺歳時記

山本健吉

I

身辺歳時記

昔の子供の遊び

A新聞が教科書問題を歴史的に展望している中に、私が小学一年生で習った国語読本、「ハタ、タコ、コマ、ハト、マメ……」が写真入りで出ているのを見て、懐しさがこみ上げてきた。すると翌日だったか、その次に改訂された読本、「ハナ、ハト、マメ、マス……」が出ていて、それは家内が習った時代のものであった。家内は私の考え方が古くさいと言おうとするとき、何時も、「何しろ、ハタ、タコ、コマと教わったひとですからね」

と言う。国語の教科書が、頭の古さ、新しさの目安となると思っているらしい。

それにしても、私の時代の一年坊主の教科書が、タコとかコマとか、子供の遊び道具を材料に

しているのは、やはり時代を示しているようだ。どちらも正月の男の子の遊びだが、今の子供たちには疎遠なものではなからうか。タコといえば、町中では大方屋根から揚げたし、コマは往来に出て廻し合った。自動車の往来のはげしい今日、こんな遊びを往来ですることは出来ない。女の子の正月遊び、ハネツキだって、やはり往来が遊び場である。

自動車時代になって、如何に往来が遊び場でなくなったか。往来を走って行くものは、せいぜい自転車と人力車ぐらいだった時代には、子供たちはみんな往来を遊び場としていた。その出来ない今の子供たちは、何と気の毒なことかと思つたが、考え直してみると、私たちが楽しんだ昔の遊びなど、今の子供たちは鼻もひっかけないだろうと思ひ知つた。

タケウマ、ワマワシ、ネツキウチ、ナワトビ、イシケリ、メンコ、ビーダマ、コイトロコトロ、カゴメカゴメ、その他、昔の遊びは往来でするものが多い。だがこんな遊びは、一つとして今の子供たちのかえりみるところではあるまい。これらは、大方とぼしい材料を利用して、子供たちが考へだした素朴きわまる遊びである。こんな単純な遊びを、今の子供たちは面白がりはいない。プラモデルなんか買ってもらつて、飛行機を飛ばすなど、贅沢な遊びでないと満足しない。

竹馬やいろはにはへとちりぢりに

万太郎

こういう句は、たぶん作者の少年時代の思い出をもとにしている。竹馬は冬の季、ことに雪の連想を伴う。自分で作つた竹馬を、昔の子供たちはみな一つずつ持っていて、往来で遊ぶ。足を乗せるところが、できるだけ高いのが自慢で、中には一本足で立って見せたり、軽業のような芸を得意とする者もあった。こういう悪童たちも、夕飯どきになると、それぞれちりぢりにわが家

へ帰って行く。だが、それだけの情景ではない。浅草生れの作者が、今は長じてちりぢりに行く方知れずになった悪童たちへの思いを籠めた、これは望郷のうたでもあった。「いろはうた」など中に詠みこんでいるところ、昔の手習い仲間たちへの思いが、ただよっている。

子供の遊びというと、次のような句も思い出す。

羽子板や子はまぼろしのすみだ川

秋桜子

双六の賽振り奥の細道へ

同

これはどちらも晩年の句だった。句には、ある哀愁がただよっているが、それは回想風景だからであろう。狂女物の「隅田川」は、もともと能の曲名だが、歌舞伎舞踊化されているから、羽子板の押絵にもされていよう。「子はまぼろしの」は、梅若塚の前での念仏に、幻のように現れる梅若丸の面影だが、あるいは作者には、それを詠む私的な事情があるのかとも思う。羽子板はもちろん正月の季節である。

「双六」の句は、どんな気持の句なのだろう。双六といえば、秋桜子氏の少年時代、私の少年時代には、子供の新年号雑誌にはかならず附録として添えられていて、遊んだものだ。これは病床にあって、正月に双六をして遊んだ昔の想い出が甦ったものだろう。だが、「奥の細道へ」とは？

もう一度、奥の細道の旅へ行きたいが、それもかなわなくなった悲しみを述べたのだろうか。奥の細道双六なんて、あったかどうか知らないが、これは道中双六に見立てたのだろう。現実には、老いて病んだ作者が賽ふりなどをするはずもないが、芝居好きの作者のことだから、重の井の子

別れの舞台など、心に持ったの作句かも知れない。

そう考えてくると、この至極朦朧とした句の雰囲気、何かはつきりしてくる。双六は室内の正月遊戯ながら、歌がるたが今も盛んに行われているのに対して、まったく言っていないほど、行われていまい。だからいっそう、この句の思いは深いのだろう。

碧梧桐とはよく親しみよく争ひたり

たとふれば独楽のはぢける如くなり

虚子

子規門の双壁として、虚子と碧梧桐とは、生涯の友であり、またライヴァルでもあった。これは碧梧桐が死んだときの悼句だが、その二人の交りを「独楽のはぢける」さまにたとえている。

これはペーゴマの風景だろうか。昔は往來の片隅や露地などで、子供たちがペーゴマに興ずる風景を、よく見かけた。空箱などに莫塵をしいて、中に窪みをつけ、そこに子供二人がペーゴマをぶっつけ、廻し合う。中の窪みで二つが触れ合うと、はじけるように飛びのく。はじき出された方が負けである。勝った方が、相手のはじき出されたコマを取り上げる。

こんな単純な遊びが、どうして面白かったのか。今の子供たちは不思議がるのではないだろうか。私はこんな遊びが懐しい。虚子も懐しくて、幼な友達の碧梧桐の追悼に、独楽廻しを持って来たのだろう。少年時代の回想を伴っているところに、この句の情趣があたたかく浮び上ってくる。

二月の雪

和漢朗詠集の詞句は、意味はともかく、口調がよいので、時々ひよいと口を衝いて出てくることがある。

雪ハ鷺毛ニ似テ飛ンデ散乱シ
人ハ鶴髦ヲ被テ立ッテ徘徊ス

という白楽天の詩など、その尤なるものの一つと言ってよい。こんな句を、中学生のじぶんから覚えていたのは、これが謡曲「鉢の木」の中にあり、そして中学時代に習った国語教科書に採録されていたからだった。

もう一つ、次の詞句が、やはり私の記憶の中から浮んでくる。

梅花ヲ折ッテ頭ニ挿セバ

二月ノ雪衣ニ落ツ

橘在列あけくれという人が作った文の一節である。これは私が学生のころ、金沢生れの伯父に宝生流の謡の手ほどきを受けていて、その時「高砂」の中で覚えた文句だった。「ジグエツ」という変わった訓みは、謡でも踏襲されている。だから「二月の雪」と訓んでは、どうも感じがでない。

ここで「二月の雪」と言ったのは、本当の雪ではなく、散りかかる梅の花びらの形容であるら

しい。だが、私は本当の「二月の雪」だと思い、美しい句だと感じていた。それが梅のことだと知って、いささか幻滅だった。「二月の雪」というと、何か特殊な連想があった。

これは陰暦二月だから、仲春の季節である。私たちの世代の者には、「二月の雪」というと昭和十一年（一九三六）の二・二六事件の日が自然に思い出されてくる。言わずと知れた、あの青年將校決起の日である。

某月某日の記録

此 日 雪 一 教師をも包み降る

草田男

という句は、この日の感慨を述べたものである。行動力のない、無力な一教師にもひとしなみに、この日の雪はこんこんと降ったのである。

流血を伴う決起の日というのと、どうして雪の日が多いのだろう。この日の外に、万延元年（一八六〇）三月三日の桜田門外の変でも、建保七年（一二一九）一月二十七日の鶴岡八幡宮での事件でも、いずれも霏々と雪の降る中の惨劇で、何か暗い印象がある。ただ一つ、元禄十五年（一七〇二）十二月十五日、赤穂浪士の吉良邸討入りだけは、陰惨な感じがしない。これだけが現実的な事件に止まらないで劇化され、国民のすべてに愛される話柄となった。

近ごろ、渡辺保氏が『忠臣蔵——もう一つの歴史感覚』という本を書いた。実に面白い本で、『忠臣蔵』が如何に日本人に愛される芝居として磨き上げられるに到ったか、その歴史が実説、虚像ないまぜながら、明快に辿られている。私には近来にない、面白い読物だったが、読物などと申しては申しわけない、すぐれたエッセイであった。